809

特250
935

白柳秀湖

日本民族の再認識

天孫民種の南方渡來說を駁す

皇民同志會刊行

始

特28
93

日本民族の再認識

═ 天孫民種の南方渡來說を駁す ═

白柳秀湖

『民族』とは何ぞや

われわれは平生漫然『日本民族』とか、或は『日本國民』といふ言葉を使用してゐるが、常識の上では『日本民族』といふ場合も、『日本國民』といふ場合も同意義に使用せられ、それで一通りさしつかへないことになつて居るけれ共、これを學問的に使用する場合には兩者の意義に截然たる區別が立たねばならぬのである。

『民族』とは、血統を異にする幾種もの人民がそれぞれの文化を持寄つて、相當の年代を經る間に渾然と融合し、血統すなはち骨骼、風貌の上に於ける特徴はもちろん言語、風俗祭祀等有らゆる生活樣式の上に於ても截然と區別することの出來難いまでに渾融同化した人民の一團をいふのである。

これに對して『國民』といふのは少しくその意味を異にする。『民族』が多くの場合に於いて國民の中核體をなし、國民の主要構成分子をなすことは當然であるが『國民』と呼ばれるものの中にまだ『民族』として完全に渾融同化しきれぬ血統的分子の存在することは『民族』の發展過程からいつてこれまた當然のことでなければならぬ。

この關係を最も分り易い具體的の例についていふならば、日・清戰役の結果としてわが國の領有に歸した臺灣の住民の如きがそれだ。人も知る如く、一概に『臺灣人』と呼ばれるものの中には、支那人の南支那地方からこの島に移り住んで、久しく中華政府の支配を受けて來た『本島人』と呼ばれるのがあり、またその一部には、この島が曾て支那の領土であつた時代からその政府の支配に服せず、それぞれの血統

と文化とを固持して來た幾種もの蕃族がある。本島人にしても、蕃人にしても、日・清戰役の講和條約に基き、臺灣全島がわが國の版圖に歸したその日から、日本の國籍に編入され、日本國民としての取扱を受けるに至つたのであるには相違なく、かれらが日本民族であると否とに拘らず、日本國の政府はかれらを日本國民として統治し、國家とその榮辱を共にするの取扱を施して今日に及んで居ること正に儼然たる事實である。また明治四十三年八月、日・韓・併合條約が成立してから、朝鮮人は總て日本國民として包容せられ、爾來三十有餘年、時勢の進運による朝鮮人自體の覺醒と、日本政府不斷の努力と相俟つて、かれらの血統と文化とは驚くべき勢を以て日本民族のそれと渾融同化しつつあること、これまたわれわれの現前に見る事實である。臺灣人も現に朝鮮人が驚くべき勢をもつて日本民族の血統と文化とに渾融同化しつつある如く、將來政府の教化事業がその功を奏して、立派な日本民族として吸收同化される日が來るか否かは、遽かに逆睹し難いことであるが、それはいづれにしても、まだ完全に日本民族として渾融同化されたものでないことだけは事實である。ただ兩者の中朝鮮人が完全な日本民族として渾融同化されることが時日の問題であると斷言してよろしいほどに顯著な進歩の足どりを示して居ることは、今日われわれが國家の將來のために最も意を强くすることの一つである。

『民族』を決定する主要條件

この具體的の事實に徴して『民族』といふ言葉と『國民』といふ言葉との相違はよくお分りになつたことと思ふ。すなはち『民族』といふ場合には、少くとも左に擧げる諸々の條件を具備することが必要である。

一、容貌、骨骼兩つながら各人各個であり、種々雜多な民族の血統を混へて成立したものであることが容易に想像されても、大體に於て共通點が多く、外見的にも解剖的にも判然とその血統上の區別の立ち難いまでに渾融同化して居ること。

二、地方によつて多少の訛りはあり、發音の上にも容易に血統上の相違を想像させるものがあつても、大體に於いて言語が相通じ、意思を疏通させる上に差支へのないものであること。

三、全人民が祭神を一にし祭祀の法を同じくすること。

四、衣、食、住その他一般生活樣式に於いて相通ずること。

以上列擧した四つの條件の具備するに到つた人民の集團をわれわれは『民族』と呼ぶのである。

『民族』と『血統』

凡そ世界に大を成した民族で、幾種かの血を混へることなしに今日に及んでゐるものは殆ど絶無であるといつてもよろしからう。多きは十數種、少きも數種の血統は混へて居ることが、それぞれのもつ神話、もしくは古典の上に著しい。

私は一つの民族が、成立するまでに攝取、包容した血統の單位を『民種』と呼び、それを『民族』の使用と嚴重に區別する。但し、兩者の中、一方だけで表現することの難かしい場合に限り『民種・民族』と重ねて使用することとする。そこでわれわれ日本民族が現に見る如く渾成され、現に見る如く世界歷史の上に巨歩を運ぶまでに、幾種の血統と、それに伴ふ文化とが包容、攝取されて居るかといふことは、何人も熱心に知らうと欲するところであり、また知らねばならぬところである。

日本民族が頗る複雜な混血民族であるといふことは、近來日本の歷史と文化とを研究するものの常識となつたかたがあり、何人も異存なきところであるが、これらのことは日本人自身が認識するよりも、日本に來る外國人が內地を旅行して受ける印象の方が正直なわけで、日本民族を人類學的にまた民族學的に考察した外國人の間には、早くからその說が行はれてゐたわけだ。たださうして幾多の血統と文化とを吸收攝取して渾成された日本民族であるが、その核心となり樞軸となつたものが、如何なる民種、もしくは民族であつたかといふことに關しては、通りすがりの外國人などによく分らう道理がない。この日本人の中核となり樞軸となつた民種、民族の血統と文化とを決定する仕事は、斷じて日本人自身によつて完成されなければならぬ。

白人の優越感に基調する人類の發祥學說や、古代文明の源流學說に依存ばかりしてゐると、とんでもないものが出來上る。自分の國の成立を知り、その民族の源流を知るといふことは、何といつてもその國の神話に通じ、古典に明かであるその國人以上に、適當な資格と條件とを具備するものはない筈だ。

『天孫民種』はどこから來たか

日本民族の核心となり樞軸となつた民種は、いふまでもなく高天原民種、すなはち天孫民種でなければならぬわけだ。高天原民種はやがて原日本人である。そこで高天原民種はどこから來たか。隨つて高天原はどこかといふことが問題になつて來る。

近頃講演その他の用向きで地方を旅行して見て、高天原が南洋方面のどこかにあり、天孫瓊々杵尊がそこから大・小の氏の上と、良賤の部民とを率ゐて海を渡り、九州の一角に御上陸になつたといふ說を信じてゐる人が存外に多く、特に大東亞戰爭勃發以來、わが國力が南方に發展するにつれ、高天原の南方說が加速度的に多くなりつつあるのは驚くべき現象で、この誤れる高天原說は將來の民族政策の上からも絶對に是正され、正しい認識を持たねばならぬのである。

隨つて私をしていはすれば、高天原が南洋方面にあつたと

いふ說ほど荒誕な無稽な臆說はないのだ。天孫民種が使用してゐたと考へられる言語、その固有の祭祀である惟神道、校倉式の家屋、服飾、衣制、食餌、武器、產業器械そのいづれを取つて考へても、高天原が南洋にあり、天孫―瓊々杵尊がそこから海を渡つて、九州の一角に御涉遷遊ばされたといふことは、殆ど箸にも棒にもかからぬ妄說だ。なるほど、天孫のこの國土に御降臨遊ばさる久しい以前、アジアの南方大陸から、海を渡つてこの國土に渡來し、九州、四國、瀨戸內海の諸島、山陽道はもとより、東海道の沿岸諸州、山陰道の沿岸諸州に亙り廣汎に蕃衍してゐた國津神、すなはち、先住民種の間にはアジア南方大陸から涉つて來たドラヴィダ人、モン、クメール人、苗族、羅々等を想像させる民種も澤山に蔓こつてゐたことであるし、それと境を接し、國を隔てて、前記各地方に占據してゐた南洋多島方面のマレイ・ポリネシア人、南太平洋方面のネグリイト族も少からず蕃衍してゐたことであるから、血統の上にも文化の上にも、南方民種が將來したと考へられる特徵は多量に見出されてよい筈だ。しかし、さうした特徵、さうした痕跡が多量に見出されるといふことをもつて、直ちに日本民族の中核體である天孫民種が南方から渡來したといふことを決定するのは臆斷もあまりに甚だしいといはざるを得ない。なるほど、天孫瓊々杵尊が大・小の氏の上と、臭賤の部民を率ゐて、北方アジア大陸の一角に御上陸遊ばされた當時の九州に於ける諸民種の分布は南方の七に對する北方の三くらひな割合であつたかも知れぬ。それゆえに南方諸民種が、日本の國土及び文化の上に遺した痕跡は天孫民種を含む北方諸民種の遺したそれよりも遙かに多いかも知れない。然しながら少數の者が必ず多數のものに打勝たれるとは限らぬ。アジアの北方大陸文化を代表する天孫民種の手には、南方諸民種の到底企て及ばぬ優秀な叡智と文化とがあり、天孫民種はその叡智と文化との力によつて、容易にこの國土に於ける先住南方諸民種を綏撫蕩平することが出來たわけであつた。

以下、日本民族の言語、祭祀、衣、食・住、武器、產業器械その他一般生活樣式の上から、私は片端から南方核心說の妄說を徹底的に粉碎して行くつもりである。その前に先づ南方核心說がかくも輕忽に、かくも匆卒に現代人の心を捉ふるに至つた原因と思はれる點に對し、いま一本止め釘を打込んで置きたいと思ふ。

誤れる高天原の南方說

日本人がその經濟生活に於ても、思想生活に於ても、歐米依存を以て能事とした明治時代から大正時代にかけて、泰西に遊學もしくは旅商するものの大部分が、路をヨウロツパ航路にとり、シンガポール（現在は昭南島）の關門を經て、イ

ンド洋から紅海を過ぎて地中海に入り、マルセーユに著船するのを常とした。船がシンガポールに到着すると、旅客は必ず一齊に上陸してラテイーフ・ホテルに憩ひ、植物園から博物館を一巡するのを例とした。シンガポールの博物館を一巡して、南洋諸島における土人の文化的資料を一瞥することは、ジャヴア・スマトラ・大小スンダ列島・ボルネオの諸島に寄港することなしに、その土俗、民情の大要を把握する最も效果的な仕事だ。人々はこの博物館を一巡しただけで、豫て朧ろげに成心づけられてゐた日本民族南方核心說の五寸釘を、がつちりと腦天に打込まれることになる。日本人の誰かを想出させる南洋諸蕃の容貌風采、家屋の構造、農業器械、手工藝品、織機、舟車の類、旅客は一目見ただけで安直に高天原の南方說を信じてしまふことになる。

しかし乍らこれは大變な間違ひである。かうした生活樣式の類似點は、われわれがもしシンガポールに多くの旅客を上陸させることが出來るやうに、容易に頻繁に滿蒙、シベリアの平野を橫斷し、中央アジア・ウクライナ・コーカサスを經て、アウストリア・ハンガリア・チエコ・スラヴアキア・ルウマニア・ブルガリアの境までも旅客を送ることが出來るならば、それらの旅客は必ずや、南洋もしくは南太平洋の諸島に於て見出されるよりも寧ろ多くの點に於いて、われわれ日本人の生活樣式に類似したさまざまの事物を發見することが出來るに相違ない。旅客が更に北してラプランド・フインランドに入り、轉じてスカンヂナヴイア半島に入るならばかれらはこの極帶コースに於ても到るところフイン・ウグリア族によつて植えつけられてゐる東洋文化と共色の何ものかを見出し得たであらう。不幸にしてわれわれは中世以降東洋と西洋との陸路が中斷されてしまつたために、海路によるごとく頻繁に旅客を陸路泰西に向けて發遣することが出來なかつた。もしそれが出來たならば、高天原の北方說はもつと早く且つしつかりと現代人の心を捉へてゐたに相違ないと考へられる。

民族の系統を決定する上に最も主要なものは言語である。よつて先づ日本語の系統からはじめやう。

言語學上から見た日本民族

一概に『言語』といふが、言語には(一)語法、(二)單語、及び(三)發音の三方面がある。苟も民族のことを口にするもので、言語の類似もしくは共通について語らぬほどのものは一人もない。言語を比較して、その類似と共通とを求めることは、どんな素人にも出來易いことであつて、前に述べた高天原が南洋方面にあり、天孫民種がそこから海を渡つてこの國土に涉遷して來たとする說の根據も大方は言語の比較にある。しかし、それらの人々の說に聽くと、大方はその比

較、考證が單語の一方面に限られ言語學上の最も主要な方面である語法（文法）と發音との二つの方面が全く閑却せられてゐる憾みがある。

言語の系統を決定するものは、單語ではなくして、語法と發音とである。言語は元來擬音から始まつたといはれるほどで、單語が最初に起り、次いで單語と單語とを綴合はせて意思表示をする語法の發達に及んだことは、常識の上からも容易に推察せられることである。日本で『烏』のことを『烏勘左衞門』といひ、英語で『クロウ』といふのも何ほどか烏の啼聲に擬した跡がある。その最も著しいのは晩春から初夏にかけて頻りに啼く『かつこう』である。『かつこう』といへば、日本全國どこにも通ずる名稱であるが、俳諧の季題などで『かつこう』のことを『閑古鳥』と呼んでゐるのも、本來は『かつこう鳥』であつたに相違なく『かつこう鳥』が閑寂夜の如き山林の眞晝の靜けさを破つて聞える情調から『閑古』の文字を當嵌めるに至つたものに相違ない。この閑古鳥のことを支那では『郭公』と呼び、杜鵑もしくは杜宇と區別してゐる。『郭公』は矢張り支那人が閑古鳥の啼聲に擬して作つた名稱に相違ない。西洋でも『カツクウ』と呼んでゐる。單語、殊に擬音に始まつた名詞の相通ずること凡そこの類である。かやうな次第であるから、ウラル・アルタイ語にしても、インド・ゲルマン語にしても、また崑崙語にしても、單語が似てゐるといふことは、當然すぎるほど當然のことで、何の不思議もないわけである。たださうして出來た單語と綴合はせて意思表示をする言語の構成となつては、さう簡單には參らぬ。言語もしくは文章を構成する語法の相違は、單語の相違よりももつと深刻で且つ根源的なものでなければならぬ筈だ。

發音上民種の血統的相違

發音の相違も語法（文法）の相違と同じ程度に深刻且つ根源的なものである。發音は、上顎と舌との相接觸する生理作用の相違に根源し、日本のやうに渾一民族が成立して久しい後までも、はつきりとその痕跡を止めてゐる。江戸つ兒が『ひ』と『し』とをはつきりと區別するに惱み、東北人が『し』と『す』『じ』と『ず』等の音別に於いて著しい難澁を示す如きもその一例である。かやうに、言語の比較といつても、單語以外に語法、發音の二つの方面があり、民族の系統を決定する上からいふと、單語の比較よりももつと重要であるので世間で言語の上から民族の系統を論ずるものの大部分が、單語の類似もしくは共通のみを捉へて得々としてゐるのはそもそも笑止千萬なことだ。

言語學上の三大語系

言語學上で、世界人類の言葉を三つの系統に分類してゐる。その一が、原日本人・原朝鮮人・原滿洲人等の使用して來たウラル・アルタイ語であり、その二はインドのヒンヅウ・アラビア人・ペルシア人及びヨウロツパ人等の使用してゐるインド・ゲルマン語であり、更にその三が、ドラヴイダ人・モン・クメール人・苗族・獨々・漢人等の間に行はれてゐる崑崙語である。この三大語系の先端は、ちやうど三つの扇を開いてその要を一箇所に繫ぎ止めたやうに、その先端を天山・アルタイ・崑崙・パミイル一圓の高原に集めてゐる。

これまでのところ、人類學は白人の體制したものに係り、白人の成心ともなり、痼疾ともなつてゐる。白人絶對優越感から、人類の發祥地をヨウロツパに最も近接してゐる暖熱帶地域の或る地點に想定する傾向が著しかつた。地中海に沿ふ北部アフリカの或る地方とか、現に地中海の海底に沒してゐる或る地方とか、或はチグリス・ユウフラテスの流域に於ける或る地方とかが人類の故鄕と想定され、學問、思想が白人に依存してゐた間、われわれは何としても人類の發祥地を上記の地方に置く成心から解放されることが出來なかつた。

しかし乍ら、學問、研究の範圍が追々に押し擴げられ、中央アジアからパミイル・タクラマカン・ゴビ地方の事情が明かになり、隨つて先史學的の新しい材料がだんだん提供されて來てみると、白人自身でさへ從來のエヂプト・メソポタミア源流說に膠著することが出來難い現狀となつてきてゐるのである。

もちろん、人類の發祥と、古代文化の源泉に關する問題は自から別個でなければならぬ。人類の發祥はいまから幾十萬といふ悠久な歲月を遡る大昔のことであり、われわれの直系祖先と考へられる眞正人類の出現したのが約五萬年以前、古代文化の曙光の輝き始めたのがいまから約七、八千年以前から四、五千年以前に亙る間のこととされてゐる。五萬年といひ、五十萬年といひ、これを口にすることは、極めて容易であるが、その長さはわれわれ人類の實際生活には殆ど交渉のない悠久の歲月であつた。この間には地球の上にも幾度か極寒、酷暑の時代が往來し、幾度もの地質的大變化が行はれてをることであるから、人類の發祥した地點が、必ずしも古代文化の花咲いた地點とは考へられない。が、それはいづれにしても、世界人類の間に普遍してゐる三大言語が、その源流を天山、パミイルの間に發して、それが末廣型に流れて前インド・後インド・支那・シベリア・アフリカ・ヨウロツパの諸大陸に瀰漫して居るといふことは、われわれに課せられた人類學上の最も大きい研究題目の一つでなければならぬ。

ウラル・アルタイ語の特徴

言語學上の三大語系であるインド・ゲルマン語と崑崙語についての說明は他の機會に讓り、日本語を含むウラルアルタイ語について、この特徴を擧げて見ることにしやう。インドゲルマン語が屈折語(インド・ゲルマン語)崑崙語が孤立語と呼ばれて居るのに對し、ウラル・アルタイ語は言語學者から漆著語と呼ばれて居る。ウラル・アルタイ語の構成上最も著しい特徴として擧げなければならぬのは、屈折語、崑崙語ともに述語が主語のすぐ次に來るのに對し、述語が客語の後につく。さうして主語、客語、述語の間には俗にて、に、を(天・爾・手・波)と呼ばれて居る助詞及び助動詞が置かれ、その介補によつて言語なり、文章なりの意味が助けられる。ウラル・アルタイ語の場合に於ける助詞及び助動詞は他の二つの語系に全くその範疇を見出すことの出來ぬ特異のものであつて、言葉それ自體では何の意味もなさぬ主語・客語・述語が、この助詞もしくは助動詞によつて、しつくりと結びつけられ、初めてこの意味を完全にする。このやうに單語と單語とが助詞もしくは助動詞によつて、しつくりと結びつけられ、全體の意味を完全にして居る有樣が、ちようど漆喰とかセメントとかいふものでピースとピースとを結びつけてゐるのによく似て居るところから漆著語の名が與へられたものである。

ただここに一言注意して置いてよいことがある。それはウラル・アルタイ語にも述語に、『活用』と呼び語形の變化はある。しかしこれをインド・ゲルマン語の場合に見るやうな語尾の變化と同樣にみてはならぬ。ウラル・アルタイ語の場合に於ける述語の語形變化は助動詞を結びつけるための用意で、インド・ゲルマン語の場合にみる時・格・數・性・相・法等を現す文法上の重要な職分と混同してはならぬ。

なほ、このウラル・アルタイ語とインド・ゲルマン語と比較すると、その語法の上に次のやうな相違が見出される。

(一)ウラル・アルタイ語にはインド・ゲルマン語に見るやうな冠詞がない。

(二)ウラル・アルタイ語にはインド・ゲルマン語に見るやうな言葉の性別がない。

(三)ウラル・アルタイ語には述語(動詞)につく助動詞が著しく多い。

(四)ウラル・アルタイ語では、代名詞の變化の仕方が著しく違ふ。

(五)ウラル・アルタイ語には、インド・ゲルマン語の中、英語に例をとつていへば、to, at, for, 等に相等する前置詞がない。

(六)ウラル・アルタイ語には、インド・ゲルマン語で時制助動詞として用ひられてゐる have に相當する言葉がない。

(七)ウラル・アルタイ語では、疑問を現す『か』もしくは『や』が述語の後につく。すなはち言語・文章の最後尾に置かれる。

(八)ウラル・アルタイ語では、形容詞が名詞の前につく。

發音の相異は生理組織から

次にウラル・アルタイ系の日本語に特有の發音について觀ることにしやう。

第一に日本語の發音には、これをローマ字に綴り直して見て、語頭に子音が二つ續いて來る場合が殆どないといつてよいほどである。もちろんイギリス語なり、支那語なりの日本語の中に吸收されたものは頗る多く、隨つてその種の日本語中には、語頭に子音の二つ來るものも少くない。しかし、それが一旦日本語の中に融込んでしまつたとなると、日本人はその獨特の生理組織(上顎と舌との關係)によつて、それを支那風・イギリス風には發音し得ぬので、結局は同じことになる。たとへば『はる』『なつ』『あき』『ふゆ』の四季を現はす大和言葉を haru, natu, aki, huyu, とローマ字綴(文部省指定の)にしてみて、語頭に子音の二つ續くのは一つもない。しかるに、イギリス語の Spring 支那語の Chun(春)ともに語頭に子音が二つ續く。

近頃、文部省がローマ字の綴方を一定し、shi, Chi, の綴方を廢し、si(シ) ti(チ) tu(ツ) に一定した理由も多分それであらう、支那人や西洋人が、容易に發音することの出來る shi, chi, tsu, の正しい發音は、ウラル・アルタイ系の日本人には容易に出來にくい仕事であるやうだ。蓋し、日本人と支那人・西洋人との間には上顎と舌との構造に根本的の相異があるからで、日本の文部省が指定した si(シ) ti(チ) tu(ツ) の綴方を西洋人に讀ませたら、日本流にシ・チ・ツとは發音しない。これはイギリス人の場合に於いて特に著しいやうであるが、Siberia(シベリア)を『サイベリア』と發音し、Siam(シアム)を『サイアム』と發音する。イギリスに行つてかの國人と南米について語るに、十人のうち七、八人までが『アルゼンタイン』と發音し、日本人の耳に『アルゼンチン』と響くのは極めて稀である。同樣に『チベット』も『タイベット』と發音する。嚴密にいへば『アルゼンタイン』と發音するのでもなく、また『アルゼンチン』と發音するのでもなくその中間をいつてゐるのであらうが、日本人には『アルゼンタイン』と聞える。tiger(虎)を『チガア』と發音する人はなく、日本人の耳には『タイガア』と聞える。チガアとかタイガアとの中間をいつてゐるに相違ない。殊に極端に思はれるのは、日本語の中に「チブス」として融込んでゐる英語が、イギリス人の發音によると、われわれの耳に「タイフオス」と響く。

第二にウラル・アルタイ語に於ける發音上の特徴として擧げべきは、ラ・リ・ル・レ・ロ の音の語頭に來るものが頗る少ないことである。たとへば『ランプ』といひ、『ルンペン』といひ、『レウマチス』といひ、いづれもインド・ゲルマン語が

日本語の中に融込んだものであり、『林檎』といひ、『蠟燭』といひ、『瑠璃』といふのも崑崙系の支那語が、日本語の中に融込んだものである。江戸時代に入つて、い・ろ・は四十八組の町火消が常設された時も『ら』組の名稱は忌避されて、その代りに『万』組が置かれた。その理由については、世にも奇怪な說も行はれてゐるが、その由つて來るところは、民族の生理組織に根源し、もつと深いところにあるのではないかと考へられる。

以上述べたところによつて、私は簡單ではあるが、言語の比較が民族の血統と文化とを決定する上に最も重要な仕事の一つであることに觸れたのである。しかしその仕事を、ただ單語の比較研究だけで能事足れりとし、まだ曾てその語法の部門にも、發音の部門にも一度として指を觸れたことのない人々によつて、鬼の首でも取つたかのやうに提唱される天孫民種南方渡來說の淺薄と輕浮とは、斷乎として排擊せざるを得ぬ。

民族も渾成と語法の勝利

民族の言語を最後に決定するものは、語法すなはち文法である。

幾つもの民種・民族がその國土に渡來し、激しい存立競爭を經る間に山の名としても、川の名としても、草木の名としても、禽獸・魚介・昆蟲はもちろん、有らゆる天然物の上に各種の單語がその名殘りを留めるわけであるが、最後に渡つて來て、それら先住諸民族を招撫もしくは蕩平し總ての血統と文化とを攝取、包容することに成功した最も優秀なる民族の持來した語法もしくは文法が樞軸となつて、その國の言語は成立つものであるのだ。すなはち語法もしくは文法を決定したものは、その國の先住民族を招撫、蕩平して、有らゆる血統と文化とを攝取、包容した最も優秀な民族であり、その語法もしくは文法を骨子として、有らゆる先住民族によつて提供された單語が、その筋肉ともなり、膚髮ともなつて、一國の言語は大成するのである。

日本語の骨子となり、核心となつた、語法もしくは文法は世界でウラル・アルタイ系五大種族の間に通用するものである。ウラル・アルタイ系といふのは、前にも述べた如くアジアの中央、天山・アルタイ・パミイル・崑崙・一圓の地を樞軸として、そこに楔型に扇の要を集めてゐる三大語系の一をいふのであつて、ウラル・アルタイ系といふ一つの扇の親骨は西の方、中央アジアからウラル山脈にわたつて、延び、他の一つの親骨は天山・サヤン・ヤブノロイ・大小興安嶺に走つて、山海關から海を渡つて、山東省の方面に延びてゐる。この二つの親骨の間に張廻された扇面こそは、蒙古・トルコ・ツングウス・フイン・ウグリア・サモエードの五大種族の蕃衍

する地域である。さうしてこのウラル・アルタイ系語法及び發音はこの五大種族の間に共通するものであるのだ。

われわれ日本民族の中核體を構成するものは、以上擧げた五大種族の中、ツングウス族と呼ばれるものであつて、朝鮮人も、原滿洲人も、東部シベリアに蕃衍してゐるツングウス系諸族も、人種學上すべてその中に包括せられる。但し、伊弉諾、伊弉冊兩柱神が高天原から蒼海原に泛んで、先づこの國土を御探檢遊ばされ、天照大御神が天孫をこの國土に御發遣遊ばされるまで高天原民種がツングウス族の單一純粹の血統及び文化を傳へてゐたものであつたか否かは、これからの學者の最も重大な研究題案として論爭のかかるところであらう。日本の建國に先立ち、支那には四、五千年の古代文化があり、インドにもメソポタミアにも、それと同等もしくはそれ以上の古い文化が花咲いてをつたことであるから、高天原民族の血統と文化とを單一純粹のツングウス族と決定することは容易に許されまい。ツングウス族を臺本とするにしても、少くとも蒙古族及びトルコ族、この二大種族の混血は考へぬわけには參るまい。

『平和』と『戰爭』

國防學は民族學を離れて成立ち得るものではない。なぜならば、陸軍にしても、海軍にしても、これを構成する兵員は民種、民族の血統を外にして、その特質を論ずることが出來ず、またその用ふるところの兵器及びそれに基く戰術陣法は、民種、民族の生活樣式を外にして談ずることが出來ぬものであるからである。

英・佛・米三大先進國家が、その資本主義的侵略の武步を擬飾するために、世界二十幾億人類の頭からその敎化として押冠せて來た自由主義倫理學によると、『平和と戰爭』とはこれを人生に於ける對蹠的の事象として觀るやうに成心づけられて來たものだ。すなはち、平和が神の心の現れであれば、戰爭はやがて惡魔の呪ひの聲であり、平和が天國の姿であれば、戰爭は地獄の相であり。平和が煦々たる陽光であれば、戰爭は陰慘な夜陰であると敎へられて來た。だがこの觀方は間違つてゐる。『戰爭と平和』とは決して二つのものではない。戰爭も平和もこれを人類生活の歷史から考へると、約まるところ『生產行爲』といふ一つの盾の兩面に當るのだ。近頃の人はよく平和產業と軍需工業とを對蹠的のものに考へてゐるが、平和產業といひ、軍需工業といひ、成るほど機械產業のそれぞれの面であるには相違ない。しかしこれを人間生活方法の太初に遡つて考へるに、そもそも人間がある器械を專ら戰爭のために用ひ、また他の或る器械を平和のために用ふるやうになつたのは、人間が農耕・牧畜を以てその主要產業とし、一定の統治者を戴いて、一定の土地に居

住する國家生活の營みを始めてから後のことである。

下等動物の爪・牙・及び嘴

われわれの直系祖先である眞正人類が、この地上に發生してから、それが鐵器の製造と音符文字の發明とによる文明生活の黎明期に達するまでに約五萬年の悠久な歳月が流れたものと想定されてゐる。一口に五萬年といふが、それがどんなに悠久な歳月であつたかは、人類最古の文明といはれてゐるメソポタミアの文化でさへ、今から約七、八千年以前のことであり、エジプトの文化が約五、六千年以前、黄河の文化が約四、五千年以前のことと想定されて居ることから推考へても知れる。この悠久な五萬年の歴史を通じ、人類はその文明生活の黎明期に達するまで、武器と生産器械とを區別せぬ漁獵生活の驚くべき緩慢な進歩の足どりを辿つて來て居るのだ。すなはち、この五萬年の間に人類の發明した一切の武器は直ちに生活器械であり、一切の生産器械は直ちに武器であつたわけだ。

眞正人類五萬年の歴史の前に類猿人五十萬年の歴史があり、更に類人猿五十萬年の歴史の前に哺乳動物の歴史があり、更にそれ以前に鳥類の歴史があつたことになつてゐる。猛禽・猛獸の生活に遡つて、戰爭行爲と生産行爲との關係をみるに、これは全く兩個の面ではなかつた。猛禽の場合に於ても、猛獸の場合に於ても、戰爭はすなはち生産行爲であり、生産行爲はすなはち戰爭であつた。隨つて猛禽にしても猛獸にしても、その體軀に具備されてゐる武器はすなはち生産器械であり、生産器械はやがて武器であつた。たとへば、鷲や鷹の身に備へてゐる爪もしくは鋭どい嘴、獅子や虎の身に具へてゐる爪もしくは牙の關係を見ればすぐ分る。爪も牙も嘴も、その生活資源を侵す强敵を屠り、その生活資料である犧牲を捕捉する武器であると同時に、その屠つた强敵もしくは捕へた犧牲を適當に料理して、空腹を滿す産業器械でもある。

鐵及び鍛鐵技術と北方民種

凡そ世界の各民種、民族の持つ戰術、陣法の特徴は、その民種・民族が持つそれぞれの武器に基調して發生發達し來つたものであること、前に觸れた通りであるが、その武器の資料として、文明生活の黎明期から今日に至るまで王座を占めて來たものは、鐵である。鐵は人類の野蠻生活と文明生活とを分つ最も重要な資源であるが、世界各方面平等一律には分布されてゐぬ。それはちやうど太陽の光線が地球を平等に照さぬやうに、鐵も世界人類の上に、その恩惠を均霑するやうには分布されてゐない。われわれが磁石を取出して方角を按ずるに、その指針の示すところは必ず北である。何故

に磁石が北方を指示するか。これは恐らくまだ世界の學者の何人も、その理由を明示し得ぬことであらう。ただわれわれは磁石の指示するところが、北方であるといふ結果だけを確めてゐるに過ぎないわけだ。

磁石の北方を指示することが必然的の關係があるかないかは私の專攻以外のことで、ここに斷言することは出來ぬが、この世界では、赤道から熱帶・暖帶・温帶・寒帶・極帶と北に向つて進むに從つて化合物の稀薄な純粋に近い鐵鑛を採取することが出來ることになつてゐるやうだ。

もちろん、鐵は世界の有らゆる部面に分布して居り、その量も頗る夥しく、水に次ぐものとさへいはれてゐる。また或る學者は、地球磁氣の關係から推して、この世界の地底は殆ど全部が鐵から成立つてゐるのではないかとさへいつてゐるほどだ。しかるにその自然鐵として存在するものは極めて稀で、大部分は他の物質と化合もしくは混合して存在する。自然鐵として存在するのは、星の世界から降つて來た隕石の中に含まれてゐるもの、若くは或る岩石の中に含まれてゐるものくらゐなもので、殆どいふに足るほどの量ではない。しかもさうして極めて僅少ではあるが、自然鐵の存在するところは南方ではなくして、北方である。世界で複雜な近代的製鐵作業によるにあらずして、鐵を精錬、鍛冶することを知つてゐるのは、北方・寒・極帶をめぐる民種民族であつた。先づこれを東方から擧げて見ると、東亞では黑龍江を距つる滿洲と東部シベリアとの境に分布されてゐる シベリア・ツングウス・滿洲・ツングウスに屬する各派、オブ・イエニセイ・二大河の流域で北極洋に面したツンドラ地帶に住むエスキモー人、更に西してフインランド人・ラプランド人・バルト海・北海をめぐつてスカンヂナヴイア半島に泉水の飛石のやうに散布してゐるフイン族及びフイン族から鐵を精錬鍛冶して精鋭な武器を製作する術を學び、それをブリテン島に持運んで、イギリス文化の一大特徴としたノルマン人の如きがそれである。

東亞に於ける刀劍の鑄造と鍛造

鐵と最も化合し易いものは酸素だ。地球上に存在する鐵鑛の大部分は酸素と化合して居るといつてよい。ただそれが包含する種々雜多の鑛物によつて色彩・形狀・硬度・性質を異にすることになる。もちろんそれは酸素の量にも關係がある。それら鐵鑛には、天然磁鐵鑛(マグネサイト)・赤鐵鑛・褐鐵鑛(ヘマタイト)等、その他にも種類は頗る多いが、製鐵といふ仕事は要するに、これらの鐵鑛中から、どうして酸素を分離し、同時に、その夾雜物を除き去るかといふことにあるのだ。日本民族の文化は大部分皇崙系の漢民族から、學んだものであるといふ過去の誤つた歴史的通念に患はさ

れて、學者の中には日本刀の鍛造術ももとは支那の歸化人が來て日本に傳へたものであらうといふ漠然たる常識判斷を追つてゐる人も少なくないやうだ。しかしながらこれは大へんな間違ひである。日本刀は初めから精錬、鍛冶して造つたものであり、支那の刀劒は元來型に嵌めて鑄造したものである。紀傳によると、黄帝の時、蚩尤なるものが、葛天廬山の金を掘り、劍・鎧・矛を造つたといふことがあるが、その方法が鍛造であつたか、鑄造であつたかに關しては何も書いてない。ここに『金』とあるのは恐らく金屬の意味で、黄金を意味するものではなからう。降つて夏の啓帝の時に至ると、刀劍の製作に關することが幾分詳しく史に現はれてゐる。すなはち啓帝の八年に、三尺九寸の劍を鑄造して奏の望山に藏めたといふことであり、同じく十四代の孔甲帝の九年には、牛首山の鐵を採つて劍を鑄造し『夾』と銘名したとある。これが支那で、刀劍鑄造のことの歴史に見えた初めである。

さらに降つて周代に入ると、刀劍製作の技が大いに進歩したものと見え、鄭の劍と吳・越の劍とが共に精鋭を以て天下に鳴り、楚の龍淵、奏の大阿・工市・吳の干將・莫耶・屠樓・越の鈍鈎・湛盧・豪曹・魚觴・巨厥等、名劍に關する記事が續々と史に現はれてゐる。

細戈千足國

かやうに支那の古劍が銅もしくは青銅の鑄造物であつたところから、日本の文化をすべて支那から輸入したものであると妄斷してをる人は、日本の古劍も銅もしくは青銅の鑄造物であつたと決めてしまつてゐるやうであるが、それはとんでもない誤りだ。われら日本民族の中核體となつた天孫民種は、アジアの北種として、崑崙系(アジアの南種)に屬する漢民族とは全く系統を異にする製鐵・鍛冶の技術を以て、別個の文化を創造しつつ今日に及んでゐるのだ。

日本の古劍も支那と同じやうに銅もしくは、青銅の鑄造物であつたとする人の說をいひかへると、天孫民種はその高天原時代から刀劍をすべて支那本土に仰いだといふことになるわけだ。それでないにしても、刀劍製作の技術を支那人から學んだといふことになる。假にそれとして、われわれの第一にいぶかしく考へることは、記・紀の記述の中にあまりにも日本刀の威德に關する記述の多いことだ。たとへば伊弉諾尊が、十握劍を拔きて軻遇突智を三段に斬つたとあり、月夜見尊が忿然色を作し、廼ち劍を拔いて保食神を擊殺したとあるなど、その切れ味の如何にも素晴しかつたことが文字の外に溢れてゐる。天孫瓊々杵尊が九州の一角に御降臨になつて、高千穗日高見に國造を遊ばされると、周圍の先住

諸民族が、その武德を嘆賞して『細戈千足國』と呼んだ。『細戈』とは精鋭な武器といふことであり、『千足』は充足の意にある。すなはち、天孫のお肇めになつた國は、精鋭な武器が充足した國と嘆賞されたのである。それほど精鋭な武器を備へ具してゐた天孫のお國の刀劍がすべて支那からの輸入品もしくはその模造品であつたといふことはどうしても考へられぬのだ。

殊にわれわれの注意して置いてよいことは、高天原で天照大御神が石凝姥命を鍛工とし、天香山の金を採つて劍を造らせたといひ、また眞名鹿の皮を全剝に剝ぎ天羽鞴を造つたといひ、明かに精錬・鍛冶に關する記述の見えることだ。『冶工』といひ、『羽鞴』といひ、日本の刀劍は明かに初めから鍛造したものであつたことがよく分る。

大韃靼人(俘囚)の刀劍鍛造術

神武天皇御東征の後、歴代の朝廷によつて、出羽・陸奥地方鎭撫のために發遣されたであらう將軍達によつて招撫蕩平された韃靼・靺鞨人は集團的に出羽・陸奥・常陸の各地方に屯田してゐた。但し『俘囚』卽ち韃靼人の名が古史に見えるのはずつと後世のことになるが、その事實は神武天皇御東征の後、幾もなく起つて居るものと見え、垂仁天皇の御宇にはこの『俘囚』の中から刀劍鍛造の技に秀でたものが選ばれて皇子・五十瓊敷命の下に、一千口の多きに上る刀劍を鍛造して居る。

この刀劍鍛造の技に秀でた『俘囚』こそ、同じく天孫民種のために招撫蕩平されて、その兵員の中に加へられたもので、薩摩・大隅・日向の『隼人族』もしくは伊勢以東、常陸・磐城に至る太平洋沿岸諸州で招撫蕩平された『夷俘』とは全くその民種を異にするものであるのだ。『隼人』『夷俘』の間には鐵を精錬・鍛造する技術が全くなかつたものだ。しかるにひとりこの『俘囚』の間にのみ、鐵を精錬・鍛造する技術の見られたのは、それがこれまで考へられて來たやうにアイヌ人でなく、アイヌ人に代つて新たに奥羽の主人公となりつつあつた韃靼・靺鞨人であつた最も有力な證據の一つである。

かやうに日本に於ける製鐵・鍛冶の技術は元來ウラル・アルタイ系に屬するアジアの北種がこの國に將來したものであつて、その文化の脈が、南方諸民族の分布されてゐたと想像される九州・四國の南端及び本州の太平洋沿岸に徵すべきものなく、北種が豆滿江・綏芬の河口地方から涉遷して來たと想定される山陰・北陸・出羽及び奥羽日高見一圓の地に徵せられるのは寔に爭はれぬ事實といふべきだ。これで日本民族の中核體をなす天孫民種及びそれと同種・異族の關係にある韃靼人のこの國に將來した鐵の文化に關する說明が一通り簡單ではあるが濟んだわけだ。

日本民族の中には、南洋方面から從つて來た諸民種の血液が多量に吸收攝取されて居ることももちろんであるが、その中核體となつた天孫民種の北種であることは、製鐵・鍛冶の文化一つを取上げて見ただけでも、殆ど爭ふ餘地はない筈だ。

人類學の使命と民族學の使命

人類學といへば、從來人間の祖先を尋ね、今より幾萬年もしくは幾千萬年と想定される地層の中から發掘されるわれわれ人類の祖先或は人類の『種』又は『屬』と考へられる類猿人の遺骨・遺骸もしくはその使用したと想定される器物について、その發生及び發達の跡を究め、人種分裂の過程を明かにすることを目的とされて來たものだ。

民族學はさうして發生した人類を幾つもの血統に排列し、それぞれのもつ特殊の文化について研究するを目的とすること、すでに劈頭に於いて述べた通りだ。ここに文化といふのは、衣・食・住を初め、祭祀・風俗・習慣等一切の生活樣式を總括していふので、近頃新聞・雜誌等で一般に用ひられてゐる文化といふ言葉とは少しくその意義を異にする。

元來、人類は舊世界の或る一地域に發生し、それが四方に押出して、氣候・風土の著しく相異る地方に割據し、相互の間に交通なく、全く隔絶した生活を送つて居る間に血統と文化との相異を生じたものであるといふことに今のところでは諸學者の說が一致してゐる。常識から考へると、人類はこの地球上幾つもの地域に發生し、それぞれの祖先を異にするかに考へられるが、これまでの研究の結果は、この常識判斷を否定し、人類はこの地球上の或る地域に發生し、そこから幾十萬年といふ悠久な歲月を經る間に、世界の有らゆる部面に押出して行つたものであるといふことに諸學者の說が一致してゐる。

氣候帶文化說

人類の血統と文化とを分つた根本的の力は、氣候・風土である。これを押詰めていへば、太陽の光線が因である。もつと詳しくいへば、人類の骨骼が變つたのも、皮膚の色が變つたのも、その衣・食・住を初め、祭祀・風俗・習慣等、有らゆる生活樣式を異にするに至つたのも、氣候・風土が因である。畢竟するに太陽の光線が因である。

もちろん、人類には文明の進步があり、文化の發達があり、永久に氣候・風土の影響を受け、天然の支配に屈服してばかりは居ぬ。叡智の力で或る程度まで天然の威力を征服し、文化の器械・器具を利用することによつて氣候・風土の相異から生ずる文化の隔絶を接近させて行くことが出來る。しかしながら、人間が叡智の力によつて天然を支配して行くことの出來るのは或程度までのことであつて、太陽の光線が地球を公平に照さぬ限り、各國家・各民族の間に生活樣式の距離が生じ、隨つてこの經濟力に優劣の起ることは避け難い。文明の進步、經濟の發達といふことを、太陽の光線が地球を支配する絶對威力の上に置いて考へることは土臺から間違つてゐる。

なるほど、人間は文明の利器を利用して、地球の距離を短縮し、蒸氣力・電氣力を交通・運輸・機關に應用して、地の涯から地の涯へ、海の際から海の際へ、有らゆる人的もしくは物的資源の有無を相通ずることが出來る。しかしながら、さうした驚嘆すべき文明の進步も、限りなき人智の發達も、太陽の光線がこの地球を平等に照さぬことからして、生ずる不公平を完全に調節し得るものではない。

自由主義國家、就中イギリスの社會的國家組織を溫床として、打建てられたマルクス經濟學の最も大きい缺陷は、經濟の進步が世界人類を支配して行く力を絶對と見、太陽の光線が地球を支配する威力の更に根本的にして、壓倒的であることに思ひを致さなかつたことにある。文明の進步、經濟の發展が地球上の有らゆる國家・民族の生活樣式を驚くべき力で統合・歸一しつつあることは事實に相違ないが、さりとてそれは決して無制限のものではあり得ない。マルクス經濟學の最も大きい弱點は、『氣候帶文化說』をあまりに輕視し過ぎたことにある。それといふのも、畢竟、過去の人類學が人間の骨骼、血統の研究にのみ重きを置き、同じく過去の民族學が、人類の衣・食・住・祭祀・風俗・習慣等にのみ重きを置き、血統と文化とを綜合して、その根本の原因をなす氣候・風土の研究、すなはち、太陽の光線の地球を支配する絶對威力を邊視するに過ぎた結果といはねばならぬ。

海には海流があり、空には氣流が流れてゐる。海流も氣流も、國家・民族の文化を支配し、その運命を決定する上に絶大の力を持つものであることは何人も疑はぬところであるが、それが決して地球上の有らゆる國家・民族の上に公平に分配されては居ぬ。たとへば、日本の國土に影響を及ぼしてゐる北赤道海流（日本海流）フイリツピン群島の沖合から、日本聯島に向つて、ひたむきに吹きつけて來る颱風、メキシコ灣から大西洋を斜めに縱斷して、イギリス海峽とアイルランド海峽とに吹きつけて來るメキシコ灣海流、それに伴つて生ずる强烈な氣流と陰暗な濃霧、これらの自然現象が、東では日本、西ではイギリスの民族的運命を支配することがどんなに力强く且つ大きかつたかは、多く說明を要せぬところである。それにしても、海流といひ氣流といひ、雨といひ、霧といふも煎じ詰めていへば太陽の光線の地球を支配する威力の一つの現はれに過ぎぬのだ。

かやうにして、人類學・民族學の取扱ふ一切の血統問題と

文化問題とは、百川の海洋に潮するが如く、太陽の光線の地球を支配する威力に落ち行く。

南北段帶が人類文化の境界

これまでの世界文化史家は、この世界を縱に兩斷して西洋と東洋とに分ち、そこに人類の血統上及び文化上の根本的相違を認め、その由つて來るところを究めやうとして全力を傾注して來たものだ。しかしこの研究の方法は、隨分とお粗末な常識上の判斷に發生したものであつて、われわれ氣候帶文化論者は、殆どこれを齒牙にかけようとはせぬのだ。かくいふわれら東亞諸民族の間に、東洋といひ、西洋といふ概念の起つたのは、十五世紀に入つてイスパニア人・ポルチユガル人によつて操られた三本マストの武裝船がアフリカ大陸の南端、希望峰をめぐつて、頻繁に極東の海洋にその姿を現はすやうになつてからのことだ。これまでの文化史家の多數は、西洋文化と東洋文化との間には殆ど完全に相容れることの出來ぬ相異があり、東は東・西は西で、この文化は因果なシヤム兄弟の如く、臀肉の癒著で永久に背き立つ畸型兒のやうなものだと考へて來た。しかるに私はその獨自の氣候帶文化說から推して、西洋文化と東洋文化との相違を左樣な公式では考へぬ。この世界を縱に兩斷して東洋と西洋とに分けるのは、單なる常識上の判斷であつて、われわれ人類の文化は、横に地球を周帶してゐる氣候の帶で分けられるものと信じて居る。この氣候の帶に關する學說の中で、われわれ素人に最も分り易い分け方をしてゐるのは、ドイツの氣候學者ケツペン氏の方式であると思ふ。

ケツペン氏の分け方によると、赤道を基準として、南と北とへ、先づ赤道に最も近いところを熱帶とし、それから或程度隔つたところを亞熱帶(暖帶)とし、次に温帶・寒帶・極帶といふ風に五つの帶に區別する。ケツペンの外にも、ズウパン式、デーヴイス式等いろいろあるが、ケツペン氏の五つの分け方はわれわれに最も分り易いやうに思はれる。この氣候帶論は民族や今後の國家の問題に重大な關係を有するので、一應觸れて置いたが、詳しい說明は他の機會に讓ることにする。

温・寒帶人は朝日を禮拜

日本民族は澤山の常闇傳說を持つてゐるが、南方民族の間にはこの種の神話も傳說も絕對にない。高天原に於ける天岩戸開きの神話はその代表的なものである。それならこの常闇の神話は、日本民族だけの持物かといふに、決してさうではなく、横に寒・極帶を傳つてヨウロツパに行つても、ゲルマン民族すなはち北方民族の間には、常闇に關する神話や傳說が澤山にあり、それが民族的の行事として各國民生活の

上に大きな力を振つてゐる。たとへば朝日に向つて禮拜するといふこと、曉の光に憧れるといふこと、これが世界の有らゆる民族に共通の習慣かといふに、決してさうではない。なるほど太陽を畏れ敬はぬ民種・民族は南にも北にもない。しかし、それと朝日を喜ぶか、夕日を慕ふかといふ問題とは全く別だ。

暖・熱帶人にとつては、朝日よりも夕日の方が有難い。沙漠に太陽の沈む時はアラビア人も、ペルシア人も、われわれが朝日の光を待ち焦れて居ると同じ心持で、その莊嚴な美しい夕燒の光に跪まづく。回教徒が夕日を禮拜すると同じやうに佛敎徒もまた夕暮の淡い光に憬れる。しかるに、それが北方に來て温・寒帶地域に入ると、必ずしもさうではない。夕燒の色は美しいが、なんとも知れずうら悲しく寂しい。これに反して、朝日の光を喜び、南方民族の夕日の禮拜と同じやうに朝日を禮拜する、日蓮上人が安房の巖頭に立ち、阿彌陀樣にお尻を向けて、東方水平線上に、黃金の朝燒けを撒き散らす朝日の光を禮拜したのは、最もよき例であり、同時に、南北兩民種の血統及び文化の相異を物語るものである。

民族の據點

日本民族の中核體である天孫民種が南洋方面から來たといふ常識論が如何に根據が薄弱であるかといふことが大體お分りになつたものと思ふ。そこで更に論旨を進め、民族の據點について述べることにする。

もちろん、天孫民種の據點といつても、其は天孫が高天原からこの國土の一角に御降臨遊ばされる以前、すでにこの國土に涉遷して來て、それぞれの生活樣式を打建ててゐた種々雜多な民種・民族すなはち國津神たちの據と對比して、その特徵を擧げることが記述の主點となつて來なければならぬわけだ。すなはち先づ天孫民種(原日本人)の生活樣式を決定した據點について述べた後、高天原民種を中核としてその肉漿ともなり、膚髮ともなつて渾成された先住民族の中、最も主要なものに屬する『おほわだつみ族』及び『おほやまづみ族』のそれに及ぶことにしやう。

高天原と蒼海原

天孫民種、すなはち、原日本人が高天原から九州の一角に涉つて來たといふことが、文獻歷史の上に明記されてゐる以上、われわれは先づ高天原の意義から決定してかからねばならぬ。『古事記』及び『日本書紀』の上に現はれて來る名詞は、人名にしても、地名にしても、頗る巧妙な、しかも進歩した分類法に基く對稱となつて居ることは、われわれがこの國の古典を深く研究すれば研究するほど讃嘆の聲を新たにせずには居られぬところだ。たとへば一方に『おほわだ

づみ』といふ民種名があれば、その對稱として『おほやまづみ』といふ民種名がある。『おほわだづみ』といひ、『おほやまづみ』といひ、實に民種の血統と生活樣式とに對する立派な辯識に基く名稱である。これはわれわれ日本民族の世界に誇り得る科學的精神の胚芽であるといふことが、決してうつろな自己滿足でないのだ。『高天原』といふ名稱にしてもその通りだ。記・紀をよく讀んで見ると、高天原といふ言葉は蒼海原といふ言葉の對稱となつて居る。一方に高天原があり、それに接して蒼海原があり、更に蒼海原の中に葦原中國があり、それが更に廣汎な地域に互り、豐葦原瑞穗國と呼ばれて居ることをよく讀んで見ると、高天原といふ言葉の第一義は大アジアの陸屋根（大陸日高見）を指したものであるに相違ない。日本の『古事記』『日本書紀』を漠然たる口碑・傳說の取りとめもない羅列のやうに考へてゐる學者も少なくないやうであるが、それは要するに、日本の古文獻を十分に研究して居らぬか、しからざれば、研究してもその眞の意味を讀分けることが出來ぬかの何れかに屬する笑止な人人ことである。

もし眼光紙背に徹する識見卓絕の人士があつて、日本の古文獻を忠實に讀んで見るならば、高天原といふ言葉の第一義が大アジアの陸屋根を指して居るといふことは、殆ど疑ひを容れるの餘地がないほどに明瞭なことであるのだ。高天原が富士の裾野であつたといひ、紀州の伊勢との境であつたといひ、或は彦根に近いところであつたといひ、それぞれの理由があるにしても、記・紀の上に盛れて居る記迹の大體から推して高天原なる言葉の第一義が大アジアの陸屋根を指したものであるといふことは爭はれまい。しかし、言葉には必ず廣・狹の二義が生じ、第一義の外に第二義、第三義といふ風にだんだんに意味が成長もし、發展もして行くのであるから、高天原といふ言葉を强ちに大アジアの陸屋根といふ廣い意味にだけ限ることは出來まい。

日高見卽ち飯田上

そこで高天原といふ言葉の第二義について考へるとすれば、高天原は天孫民種がアジア大陸に於いて最後に駐屯された地點の稱呼であるとせねばなるまい。天孫民種はもと疑ふやうもなき狩獵民種であつて、アジア大陸の廣汎な範圍を『國覓ぎ』しつつ涉り歩いて居つたものであつたが、伊弉諾・伊弉冊・男女兩柱神が蒼海原に向つて乘出される直前、駐屯された地域が、記・紀の上で高天原と呼ばれて居ることも否むことは出來ない。

そこで、さうした狹い意味でいふ高天原がどんな地形であつたかといふことを考へてみる順序になつて來る。

そもそも北方アジア大陸でウラル・アルタイ間に横はる廣

漠たる平原を徒遷・移住して居た狩獵遊牧民族が好んで駐屯した地形を考へるに、そこは必ず青い山で圍繞せられたる中央の盆地であつて、その周圍の山々からは幾筋もの河流が源を發し、盆地の中央を貫流する本流に合し、河流の落合ふところには相當廣濶な平野が開け、家畜を飼育するにも、穀芻を耕作するに頗る都合のよい土地柄であつたに違ひない。天孫民種はかやうな地形を『日高見』といつて居たものらしい。日本聯島に涉つて來てからも、それに似た地形を常に『日高見』と呼んでゐる。

『日高見』といふ言葉についての研究は私を以て初めてとするものではないが、しかし、從來『日高見』といふ言葉の意義について考へた諸大家の御說は、私から見ると、何うも中途半端のもののやうに思はれる。從來の學者によると、日高見は高原であつて、太陽を近く仰ぐといふところから起つてゐるとされてゐる。しかし、それは私には肯けぬ。『日高見』の『ひた』は太陽を近く仰ぐ高地といふ意味ではなく、穀芻を植え、食糧を滿すに適した平地といふ意味であらう。卽ち『ひだ』は『日田』と書き、『比田』と書き、『飛驒』と書き、『肥田』と書き、『稗田』と書くが、その和訓は『飯田』であらう。『飯』を『ひ』と讀む例は記・紀の中に澤山見出される。

南方アジア大陸のタイ、ビルマあたりを原產地とし、蘭領インド諸島にも、南支那地方にも、繁殖して盛に耕作された米は、天孫瓊々杵尊が九州の一角に御降臨遊ばされる前、すでに豐之國なる保食神からその種子と耕作法とを傳へられて、高天原にも試作されてゐたことが『紀』の一書によつて、明瞭に知られるのであるが、ここに『ひだ』といふのは、必ずしも米が高天原に耕作されるやうになつてから後のいはゆる『天長田』『天狹田』をいつたものと見ずともよからう。米が高天原に移植される前からでも、北方アジア大陸には北方アジア大陸原產の穀芻が種々あつたに相違なからう。くま（熊）がこめ（米）の古語であるが、ひ（飯）は必ずしも前に限らず米の輸入せられる以前、ウラル・アルタイ系諸民種によつて栽培されて來た穀芻の全てを指したものといふべきであらう。

さてウラル・アルタイ系諸民族の間に共通する語法の特徵として、形容詞が名詞の上に來るのが原則であるのに、『ひだかみ』といへば如何にも形容詞名詞の下に來て居るやうに思はれる。だが、これはよく考へるとさうではない。『ひだかみ』は、『ひだある上高地』の略稱であつて、その言葉の現はさうとした目的は、『かみ』すなはち『上高地』であり『ひだ』はその形容詞となつて居るわけである。

『日高見』と『國』及び『國覓ぎ』

いま大陸の日高見についてこれを見るに、一筋の主流が幾つもの日高見を貫流し、それに個々の日高見の發する支流がその平野の中央で落合ふ關係から、日高見と呼んだ地形は必ずただ一つ孤立して存在せず、幾つもの日高見、が貫流する主流に沿つて、たとへば紺屋のかめを並べたやうに相接して居ることになる。天孫民種はかうした地形を大體に『日高見』と呼んで居たが、その數ある盆地の一つ一つを『國』と呼んで居たやうに考へられる。典型的な日高見のあるところには必ず『國』といふ言葉を冠した地名があり、その國と國とを境する山を『國見嶽』とか『國見峠』とか呼んでゐる。天孫民種は一つの國に住み飽きると、更に河流を傳ひ、國見峠を越えて、他の肥沃な豐饒な住みよい國を覓もて征行されたものと思はれる。

北方アジア大陸で、その規模の最も雄大な日高見を擧げよといへば、それは朝鮮と滿洲との國境で、白頭山を中心とする鴨綠江・圖們江・松花江・綏芬江及び松花江に注ぐ牡丹江の水源地帶を占むるいはゆる東邊道一圓の地域がそれに當る。

この東邊道―日高見こそ前に述べて置いた狹義の高天原にあたるところなのである。しからば廣義の高天原すなはちアジアの大陸屋根はどこかといへば、それは深くあげていふまでもなく、ゴビ・タリム・パミイルと連互して、東方・シベリアの大平原、西方・インド及びインド支那の二大半島、南方・支那大陸、西方・中央アジアの大草原を四方の小屋根として俯瞰する、隋圓形の大沙漠地帶がそれに當ること、東半球の地圖を披いて見れば、何人にも一目瞭然たるべき筈のものだ。

そもそも人類の故郷を絶海の孤島でなく、大陸であつたとする現代科學の說に傳ふとすれば、その大陸に於ける大河流、殊にその水源地帶が人類の發生及び發達に深い關係のあつたこと、何人も直覺的に思ひいたるところであらう。何故かといへば、人間にはその發祥地からのコースに引きつけられる一種の本能があるからだ。

東半球こそ大日高見

大アジア陸屋根の構造は、すでにそれ自體が一つの雄大莊嚴な大日高見である。この大日高見こそは、東半球にありとあるなべての大半島なべての大平原を灌漑する一切の大河川の水源地となつて居る。北側を緣づける天山・アルタイ・サヤン・ヤブロノイ・大小興安嶺は山脈といふよりも、むしろ山塊といふに近く、この山塊と山塊との間からは東から西へ、黑龍江・レナ河・イエニセイ河・オビ河がその源を發し、

シベリアの大平原を迂餘してそれぞれ極帶の氷海に注いで居る。

また、西側を緣づけるパミイル高原からは、北流して中央アジアのバルハシ湖に注ぐイリ(伊犂)河がその源を發し、西北に落ちてツラン平原のアラル海に注ぐアム河・シル河の二大河川がその源を發し、東流して西藏高原とタリム盆地との境なる沙漠の底にその姿を消すタリム河がその源を發して居る。

更に南側を緣づけるトランスヒマラヤ山脈とヒマラヤ山脈との中間に橫はる細長い帶のやうな高地からは、インドのベンガル州に落ちてベンガル灣に注ぐ、ブラマトフ河の上流、サンポウ河がその源を發して居る。ブラマトフ河の迂廻は非常なもので、大ヒマラヤ山脈を完全に半周して居る。最後に大アジア陸屋根の東端に住する甘肅・青海・西康の三省は、支那・佛領インド支那・タイ・ビルマに落ちて東方及び南方の海に注ぐ大河川の水源地で、その甘肅・青海・綏遠・寧夏四省の水を集めて北流するものが『黃河』となり、反對に南流するものが揚子江となる。

以上の敍述によつて、大アジア洲の陸屋根はすでにそれ自體が一つの大きい日高見であることはよくお分りになつたことと思ふ。しかしながら、この大日高見の中でも、特にわれらの嫡祖にあたる高天原民種が『日高見』と呼んでひたぶるに憧れた典型的地形に當るのは、外蒙古の一角と、パミイル高原とである。

高千穗・日高見

天孫―瓊々杵尊が高天原から大・小の氏の上及び各氏に配屬する多くの部民を引具して御上陸遊ばされた地點がどこであつたかは、今のところまだよく分つて居ない。しかしながら、天孫のために朝鮮海峽の水先案內を申上げ、御船を『筑紫の海北』に導入れ奉つたものが、國津神の中でも最も優れた特殊の造船術と航海法とを持つて居た豐族すなはち『おほわだつみ族』の祖神、宗像神であつたことはほぼ明かとなつて居る。天孫及び供奉の諸員は宗像神の御案內で九州の或る地點に御上陸遊ばされ、そこから河流を傳つて神祖御三代を通じての根據地となつた高千穗・日高見に御進出になつたものと察せられる。ここに高千穗・日高見といふのは今の大分縣に屬する裏阿蘇の高原一圓の地域をいふのである。

この高原の中で、神祖御三代の駐屯地として古史の上に最も著しいのは宮崎縣西臼杵郡の高千穗であるが、天孫の御勢力は豐前・豐後に亙る海岸を廻廊として、竹田・久住・森・日田一圓の地に遍かつたものに相違あるまい。就中、日田は日高見の代表的地形を具備し、その盆地の一角にある直入

郡の竹田といふ部落を抱擁して居るのも注目に値する。

雲・伯・日高見を占據せる三大先住民種

古代出雲國は、天孫民種と同種・異族の關係に屬するアジアの北種(白兎族)が對馬海流に乘つて石見・出雲・伯耆・因幡の海岸に漂着した『おほわだつみ族』(豐族・鰐族)及び吉井川・旭川・川邊川の岸を傳つて分水嶺を越え雲・伯・日高見に進入したと想像される『おほやまづみ族』と境を接して占據した地方であつて、この三大種族を打つて一丸とし、古代出雲の文化を創建されたものが、素盞嗚尊及びその御子息、大國主神である。もちろん、素盞嗚尊及び大國主神の成功が著しく速かで、その政績の目覺ましきものがあつたのは『おほわだつみ族』(豐族・鰐族)を代表する少彦名神の協力があつたからでもあらう。いづれにしても、古代出雲國は天孫民種を含むアジアの北種、少彦名神によつて代表された『おほわだつみ族』及び手名椎・足名椎夫妻(奇稻田姫の兩親)によつて代表される『おほやまづみ族』この三大種族の聯立國家であつたことは昭々として記・紀の記述の明示するところである。

この三大種族はその固有の文化に從ひ古代出雲國に於いてそれぞれその據點を異にしたと考へられる。すなはち『おほわだつみ族』はその名の示す如く石見・出雲・伯耆・因幡の海岸に近い平野にその據點を置いて居つたことであるし、『おほやまづみ族』は山陽道との分水山脈を越えて進入し、日野郡・能義郡・仁多郡の山間に居を占め『おほわだつみ族』と幾分耕作法を異にする米作によつてその生活を營んで居つたことであらう。それは手名椎・足名椎夫妻の間に儲けられて居た女が奇稻田姫の名によつて呼ばれてゐたことによつても知られる。素盞嗚尊が八岐大蛇を退治したのは簸の川上といふことになつて居り、今日では斐伊川に流れ寄つた箸をたよりに上流に遡り、そこに八岐大蛇の爲に掠奪さるべきわが女の運命に泣いて居る手名椎・足名椎夫妻を發見されたといふことになつて居るが、その簸の川は斐伊川よりも日野郡の日野川の方が有力であつて、鳥上峯といふものも船通山が正しいとする說が相當有力である。

日野川はその水源地方の溪澗が全く花崗岩から成り、その腐蝕によつて生ずる砂鐵の產額は多里・里坂・根雨の間を最も多しとする。この地方に行くと、腐蝕した花崗から遊離して河床に沈澱した砂鐵の淘汰されて谷川の瀨を打ちつけて居るのが、素人目にも直ちにそれと認定される程だ。この砂鐵を採取し、蹈鞴にかけて精錬し、精銳な刀劍を鍛造する特殊の技術を持つて居たウラル・アルタイ系の一派に屬するオロチ族が早くからこの地方に蕃衍し、『おほやまづみ系』の諸部落を劫掠して居たといふことは、何人も容易に考へ

られることである。素盞嗚尊が八岐大蛇を退治された時、その尾の近い部分から都牟刈の太刀が現はれたといふことも多分その邊の消息を傳へたものであらう。天孫民種である。素盞嗚尊とオロチ族とはもちろんその種族を異にして居たものであるが、ウラル・アルタイ系といふ大きな人種の枝から見て行くと、その血統と文化とに於て少からず相通ずるところがあり、素盞嗚尊の智略・武勇を以てして容易にこれを威服することが出來たものに相違ない。

阿賀野川以北に於ける韃靼・靺鞨族

オロチもしくはオロチョン族の如きツングウス族の一派は、古代出雲國にも蕃衍してゐたこと明かであるが、更に能登半島を越えて佐渡・越後・出羽の海岸に及ぶと、その占據の跡が更に著しく濃厚なものがある。かれらの佐渡・越後・出羽地方への涉遷・移動は神祖三代の葦原中國御經略よりも少しく遲れたもののやうに考へられるが、それかといつて文獻歷史の上にその記述の徵すべきものがあるとないとに拘らず、神武天皇の御建國頃から、間歇的に集團移住するものが絕えず、成務天皇の御宇、別皇子もしくは國造の北陸地方に發遣せられるものの多かつたものは、かれらの集團的に北陸・出羽地方に移住するものの多きを加へつつあつた證左と見るべきであらう。

大化朝廷(孝德天皇)の頃に至ると出羽方面にはもう滿洲・ツングウスもしくはシベリア・ツングウス族の大植民地が打建てられて居たものに相違なく、高志(越)には渟足・岩船の兩柵が設けられ、信濃の民(恐らくおほわだつみ系安曇族)をここに移して、その固めとされたことが記錄されて居る。渟足は現に新潟の對岸にその名の殘つて居る沼垂であり、岩船は村上と中條との間の海岸にその名が現存して居る。大和朝廷が阿賀野川の線に於て、滿洲ツングウスもしくはシベリア・ツングウスの高志(越)の國に侵入して來るのを防ぐに苦心された跡がよく窺はれる。

かうしてまづ佐渡・出羽の海岸に蕃衍した大韃靼人が、或は渟代(能代)平野から能代川を遡り、或は飽田(秋田)平野から雄物川を遡り、或は庄內平野から最上川を遡り、奧・羽の背梁山脈を突破して奧州に進出し、先づ好んで占據しやうとしたところはどこであつたかといへば、それは北上川を團子の串として突拔かれた幾つもの日高見であつた。

今日なほ『國見峠』或は『國見岳』の名が殘つて居るのも、たしかにウラル・アルタイ系諸民族の間に血統と文化との相通ずるもののあつたことを思はせる一つのしるしだ。

北方こそ日本民族の道場

日本民族の核心となり、樞軸である高天原民種は、北方大

陸系であることは以上の説明によつて、略ぼ明瞭になつたものと思ふ。しかるに、劈頭にも觸れた如く、世上往々にしてわが天孫民種が南洋方面よりこの國土に渡來せるものの如く信じ、また說をなすものが存外に多いのである。しかしながら、高天原の南方說ほど荒唐な無稽な臆說はなく、わが天孫民種が使用して居た言語、その固有の祭祀である惟神道・校倉式の家屋・服飾衣制・食餌・武器・產業器械その他いづれを取つて考へてみても、南方說ほど妄說はない。なるほど、天孫民種がこの國土に御降臨遊ばされる以前に、アジアの南方大陸又は南洋方面から、この國土に渡來し、九州や四國または瀨戸內海の諸島、山陽道はもとより、東海道の沿岸諸州、或は山陰の沿岸諸州に亙り、かなり廣汎な地域に蕃衍して居た國津神、すなはち先住民種の間にはアジア南方のドラヴイダ人・モン・クメール人・苗族・羅々等との民種が澤山蔓つて居たことは十分に想像されるし、それと境を接し、國を隔てて多島海方面のマレイ・ポリネシア人、南太平洋方面のネグリイト族も少からず蕃衍して居たことは、凡ゆる點から推定されるので、隨つて血流の上にも、文化の上にも南方民種が將來したと考へられる特徵が多量に見出されることは當然なことであるといはねばならぬ。しかるに輕卒にも、そのやうな痕跡があるといふだけで、直ちに日本民族の中核體が南方から渡來したものなりと斷言することは臆斷といふも餘りに甚だしい。尤も當時の諸民種の分布は南方七に對して北方が三くらゐな割合であつたかも知れぬが、その數的な比率を以て直ちに日本民族の中核體そのものまで、南方系であるといふのは妄斷である。もちろんこの國土及び文化の上に七の割合にあつた南方民種の遺した痕跡が、天孫民種を含む北方諸民種のそれよりも遙かに多いかも知れぬが、さればといつて、われわれの身邊に例をとるならば、指導者と被指導者の關係が、數量的比率に依つて決定することが如何に愚劣であるかは敢ていふまでもあるまい。

アジアの北方大陸文化を代表する天孫民種の手には、南方諸民種の到底企て及ばぬ優秀な叡智と文化を有し、その叡智と文化の力によつて、この國土に於ける先住南方民種を綏撫蕩平が出來たのであつた。さきに私は氣候帶文化說について一應の自說を紹介したが、南方の暖・熱帶地域と北方の溫・寒帶地域とは根本的に文化と血統を異にし、しかも文化的には北方民種は、遙かに優秀であつた。隨つて氣候及び風土がわれわれ民族の上に如何に大きな力を有するかは既に說明した通りであるが、更に私は南・北兩地帶の民種・民族の文化的發達がどうして相異するか、その原因について簡單に觸れて置く。

南方文化の特徵は、溫・寒帶ほどに苦心せずとも、容易に

生活資源を得ることが出來るといふ事實に根基してゐる。一年を通じて食糧が豐富であり、隨つて北方民種・民族ほど頭腦を働かせ、筋肉を勞する必要がない。たとへば、日本人の常食である米がそれで、印度やビルマ・タイ國の如きは年に三度まで收穫することが出來、それが日本に來ると、一年に一度の收穫さへ却々容易ではない。それもちよつとした風水害・冷害・害蟲等で凶作の難に脅かされねばならぬ。この一事について見ても北方と南方とを比較して考へると、生活資源を得る上の難易に甚大な隔りがある。また衣服や住居についても同樣である。溫・寒帶地方では冬季に於ける保溫の設備に一苦勞せねばならぬ。太初の人類が冱寒に脅かされ、洞窟を求めてその中に竄入し、纔に凍死を免れたことは、人智の發達した第一歩であつたといつても差支へあるまい。北方地帶の民族は冬の保溫設備・夏の通風設備、いはゆる五風十雨の循環に對して、家屋の構造は、最も多く工夫を凝らさねばならぬ。かやうな次第であるから、暖・熱帶人は衣・食・住にはそれほど苦勞をする必要がない。生活資源が極めて容易に獲得出來るために人間性が怠惰になり、持久性を喪失する。いはゆる克服する熱意と建設力を失ふのである。北方民族よりも遙かに太陽の光に惠まれてゐる南方民族は、環境に惠まれる結果と、直接氣候の人體に及ぼす影響から、宗教的であつても、科學的でない。即ち南方民族は抽象的であるに對して、北方民族は極めて具體的であるといへやう。例へば、農事の場合にしてもさうで、北方民族は新しい土地を開墾し、溝をつくり、池を掘つて灌漑に備へ早くから農業は驚くべき急速に進歩して行くにつれ、人間の一旦占據した土地に對する愛著の情が漸く熾烈となり、追々に狩獵、遊牧の生活をやめ、一定の支配者を戴き、一定の人民をもつに至つたのである。從つて北方民族は科學的に文化的に發達したと同時に、政治的にも進歩したその原因は環境に惠れぬため、絕えず生存のために凡ゆるものとたたかひ、これを克服して行かなければならなかつた。そしてそこに協力と建設とが齎らされたのである。

いまや大東亞戰爭を契機として、日本民族の南方進出が計畫されつつあるとき、私は以上の日本民族論を結論して、南方地域は物資が豐富であるといふことと別個に、人間錬成の立場から北方はわれわれにとつて飽までも『道場』でなければならぬといふことを特に强調して擱く。

× × × × × ×

420
165

昭和十七年七月一日印刷
昭和十七年七月五日發行（非賣品）

著者　白柳秀湖
東京府北多摩郡谷保村國立

發行者　渡邊昇
岐阜縣大垣市南高橋町九九
西濃印刷株式會社代表者

印刷者（中統九）河田貞次郎
岐阜縣大垣市南高橋町九九

印刷所　西濃印刷株式會社

終